新・改善改革探訪記

No.131　創意社・山口 幸正

稲むらに火をつけ人々を津波から救った商人 濱口梧陵翁の事績を訪ねて

〈取 材 先〉稲むらの火の館（和歌山県有田郡広川町広671）

1854（安政元）年11月５日，太平洋に面した紀州広村を地震が襲った。揺れが収まってから海岸を見に行くと，海水が干上がって海底が見えている。「津波がくる」と確信した濱口梧陵（1820-1885）は，村でいちばん高い所にある八幡神社に逃げるよう，村人たちに声をかけて回った。日が暮れて暗闇の中，海水が足元を濡らしはじめたとき，梧陵は村の若者たちとともに，田んぼの中の刈り取った稲を積み上げた稲むらに次々火を放った。村人たちはそのあかりを頼りに八幡神社に逃れ，村人の犠牲はほとんど出さずに済んだという。後に「稲むらの火」として小学校の国定教科書に掲載されたこの話を通じて，津波の前兆があれば，いち早く高い所に逃げるべきという教訓が人々に伝えられた。この話はさらに海外にも伝わり，安政南海津波が起きた11月５日は，2015年の国連総会で，日本を含む142ヵ国の提案，全会一致の賛成によって「世界津波の日」に制定されている。さらに，2018年，旧広村を含む広川町は「津波後の復興の記憶が生きる町」として日本遺産に認定され，2007（平成19）年には梧陵の旧宅が，梧陵の事績を伝承し，地域防災を語り継ぐための拠点として「稲むらの火の館」という名前でオープンした。濱口梧陵とはいったいどんな人で，何を残したのか，「稲むらの火の館」の﨑山光一館長に，濱口梧陵翁の人と仕事を解説していただいた。

■国定教科書の「稲むらの火」

「稲むらの火」の話で印象深いのは，主人公の的確な状況判断力とそれを村人に的確に伝えたリーダーシップである。村人たちは彼の指示を疑うことなく受け入れ，それに従っている。主人公のこのリーダーシップはどこからきたのか。

「稲むらの火の館」館長・﨑山光一さん

濱口梧陵翁肖像

稲むらの火の館

国定教科書のもとになったのはラフカディオ·ハーン（小泉八雲）の『A Living God（生ける神）』という英文の短編小説である。それをもとに広村の隣町，湯浅町出身の小学校教師だった中井常蔵が「津波美談」を書き，文部省がそれに「稲むらの火」という題を付け，1937（昭和12）年の小学５年生の国語教科書に掲載した。

教科書の主人公は村の庄屋を務める「五兵衛」という老人になっているが，実際の梧陵は当時34歳。醤油醸造業・ヤマサの主人で，実家のある広村と，醤油工場のある銚子と，販売拠点のある江戸の３ヵ所を行き来しながら，店の経営に当たっていた。ヤマサの経営者は代々「濱口儀兵衛」を名乗ったが，梧陵はその７代目で，「梧陵」という雅号で呼ばれるようになったのは，50歳で娘婿に８代目を継がせて以後のことである。

■濱口家のルーツ

津波が広村を襲ったのは，その時が最初ではない。かつて広村の民家は1700戸を数えたが，その４分の１が天正年間（1573-1592）の津波で失われ，さらに1707（宝永４）年の津波で850戸中700戸が流失し，その結果，多くの人が広村を去った。

濱口家の先祖は，村内の安楽寺で代々住職を務めた家系だったが，元禄年間（1688-1704）に長男の吉右衛門家（東濱口家）と次男の儀兵衛家（西濱口家）に分かれ，西濱口家の初代儀兵衛は，広村から下総・利根川河口の銚子に出て「広屋儀兵衛商店」という看板を掲げて醤油醸造業をはじめた。この屋号が後に「ヤマサ」に変わる。銚子は17世紀中頃に，同じ広村出身の崎山治郎右衛門が港を築き，イワシ漁を開拓して繁栄したところで，多くの紀州出身者が移り住んでいた。

銚子は，醤油の原料となる塩や麦や大豆の産地から近く，利根川をさかのぼって江戸川に出ることで大消費地，江戸との水運にも恵まれていた。その地の利を生かして，ヤマサの商いは次第に大きくなり，濱口家は大きな財を築き，代々の当主は，紀州広村と銚子の間を行ったり来たりする生活を続けていた。

■梧陵の生い立ち

梧陵は，1820（文政３）年に６代目儀兵衛の弟の子として広村で生まれた。生後６ヵ月で父が亡くなり，11歳で６代目の養子となり銚子へ赴くが，江戸の醤油問屋・広屋吉右衛門の店にしばらく滞在し，その後醤油工場のある銚子へ入っている。銚子では，奉公人と同じ着物を着，同じものを食べ，同じ生活をしながら，醤油づくりを身につけ，そのうえに剣術や易経（儒教の経典）を学んだという。儀兵衛家の跡継ぎとして育てられ，33歳で家督を相続して７代目儀兵衛を襲名した。

この当時，日本近海にしばしば外国船が現れ，幕府は1825（文政８）年に異国船打払令を出し，そのことへの反対を封じ込めるために蘭学者たちを弾圧した。「蛮社の獄」といわれる。梧陵は，そんななかで代々続いてきたヤマサの経営を学ぶとともに，この国を取り巻く諸般の情勢に深い関心を持ち，さまざまな人と交流した。

■黒船の来航

その１人が蛮社の獄から逃れ，江戸から銚子にやってきた三宅艮斎（みやけごんさい）という蘭方医だった。梧陵は艮斎と交流を重ね，艮斎から当時の西欧事情についてさまざまな知識を得た。当時流行したコレラから，ヤマサの従業員や銚子の人々を守るため，銚子の開業医・関寛斎を艮斎ら蘭学医に紹介して，治療法と防疫法を学ばせた。

また，蘭学者たちが資金を出し合って建てた江戸お玉ケ池の種痘所が火災で焼失し，艮斎がその再建に奔走するようになると，梧陵は最初に300両，次いで400両の資金を寄付して再建を支援した。後に東京大学医学部となる施設である。

梧陵はまた，関寛斎に長崎遊学をすすめ，遊学の費用100両を引き受けた。また，函館の回船問屋・渋田利右衛門を通じて貧乏旗本だった勝海舟と出会い，勝が洋書を購入するのを支援している。

「海防八策」によって国防を説いた佐久間象山の門下生にも名前を連ねた。その影響もあって，1853（嘉永６）年，ペリーが４隻の黒船を率いて来航したとき，梧陵は三宅艮斎を通じて幕府外交方の田辺蓮舟に「鎖国を固守し攘夷論を振り回すは物陰から吠える犬にも似て卑屈至極の所為というべし」との自分の意見を伝え，田辺蓮舟を通じて，老中小笠原壱岐守に海外渡航を願い出た。黒船に同乗してアメリカに渡り，欧米の事情を自分の目で確かめたいというものだったが，鎖国の掟は厳しく，その願いが叶うことはなかった。同じ頃，吉田松陰は黒船への密航を企てて捕らえられ，後に萩藩の手で死罪になっている。

ペリー来航から７年後の1860（万延元）年，勝海舟は幕命により，咸臨丸の艦長としてアメリカに渡った。海舟はその前に，和歌山の加太へ出向いて３日間滞在し，梧

耐久社の建物

広村堤防

陵に同行をすすめたが，梧陵は結局同行を断った。このとき，梧陵による度重なる支出でヤマサの財政状態が思わしくなかったためとも，ヤマサの支配人や番頭らによる公金横領事件があったためともいわれる。

■耐久社

外国船が迫る中で，この国を守るには若者たちの結束が必要だと，梧陵は考えたようだ。1851（嘉永４）年，故郷広村で「崇議団」という村の若者たちの自警組織を編成。その後指導者を招いて，広村田町で「広村稽古場」を開き，若者たちに剣術と国学，漢学を教えた。安政南海津波のとき梧陵の命を受けて，田んぼの稲むらに次々火をつけて回ったのは，この「広村稽古場」の若者たちだった。

「広村稽古場」はその後，恒久的な組織を目指して「耐久社」と名前を変え，現在の広川町立耐久中学校と和歌山県立耐久高校へとつながっている。現在の耐久中学校敷地内に耐久社の建物が残っており，見学者やイベントの会合などに利用されている。また，耐久中学校の校庭には，梧陵の銅像が立っている。

■広村堤防

安政南海津波の後，村人の生命は助かったものの，家や田畑，漁師は舟と漁具を流されて，村人たちは生きていく術を失った。このままではやはり広村を出ていくしかない。そこで梧陵は，村人たちの家の再建や農地の回復，漁師の船や漁具の購入を支援した。さらに，人々に仕事を提供するという目的もあって，新たな堤防を築くことの許可を紀州藩に願い出た。

広村の海岸沿いには，戦国時代にこの地域を領有した畠山氏の築いた高さ２～３ｍの堤防と，紀州徳川家初代・徳川頼宣が築造した石堤があったが，安政南海津波はそれを越えて家や田畑を押し流した。そこで，その内側に高さ５ｍ，根幅20ｍの堤防を600ｍにわたって建設し，堤防の機能を補強するために浜側に松並木を植えた。数

広川町役場前の
松明を持った梧陵の銅像

年にわたったこの工事に従事した人数は１日 に400～500人，延 べ５万6000人に及 び，梧 陵は，この間の日当を負担することで村人の生活を支えた。

1946（昭和21）年には，南海地震による高さ４ｍの津波がこの地域を襲ったが，この堤防のおかげで広村の中心部は大きな被害を免れたという。

■政治の世界に入る

紀州藩は，梧陵の安政南海津波での働きとその後の防災活動を高く評価し，梧陵が中央に人脈を持っていることもあって，1868（明治元）年，梧陵を藩の勘定奉行に，次いで参政に任命した。以後，梧陵は政治の世界に足を踏み入れ，後の徴兵制につながる農兵制を進言するなど，藩政改革について意見を述べている。

1869（明治２）年の版籍奉還後は，学習館知事，有田郡民政局知事，松阪民生局長などを務め，1870（明治３）年には，政務に専念するため，家業を娘婿の幸三郎（８代目儀兵衛）に譲り，その後「梧陵」と号するようになった。

学習館知事を務めたとき，梧陵は「共立学舎」という英語学校の設立を計画し，福沢諭吉を迎えて学制改革を行おうとした。しかし，実現には至らず，結局，福沢の提案で，慶應義塾で学んだ紀州藩士・松山棟庵によって学制改革が行われることになった。

1871（明治４）年には，大蔵卿・大久保利通から推挙されて，梧陵は中央政府の駅逓頭（郵政大臣）に任命された。在任期間はわずか20日間で，その後を現在の郵便制度をつくったとされる前島密が引き継いだが，郵便制度の発案者は実は梧陵だったともいわれる。

1880（明治13）年に，梧陵は和歌山県会議長に就任。その後，県内の同志とともに「木国同友会」を結成して，県内の国会開設請願活動の先頭に立った。

そして1884（明治17）年，若い頃からの念願だった外遊の旅に出た。憲法発布と国会開設を前にして，先進諸国の憲法や国会の姿を学ぶためだったといわれるが，渡米中に病に倒れ，1885（明治18）年，65歳で客死した。

醤油醸造業・ヤマサの経営者としての梧陵は，銚子と江戸にそれぞれ製造と販売を統括する支配人を置いて，実務を担当させた。自らは広村を拠点にしつつ，広村と江戸，銚子を何度も往復し，支配人に現状を確認し，指示命令を与える形で経営を続け

た。

商いによって巨大な財を築きつつ，その果実を，人々のため，地域のため，社会のために惜しみなく使った。ヤマサの従業員には広村や紀州から移り住んだ人が少なくなかったから，梧陵のそうした振る舞いに理解を示す者は少なくなかっただろう。梧陵にとっての商いは，そのための手段であり続けた。

濱口梧陵の碑

広八幡神社境内の広村堤防を望む一角に，勝海舟による濱口梧陵碑があり，そこには「君は田のほとりの稲むらに火をつけ，まわりを明るくし，人々はそれを頼りに逃げおおせ，死をまぬがれたのである…」という意味の漢詩が刻まれている。

※本稿の執筆に当たって，次の資料を参考にしました。稲むらの火の館編『濱口梧陵学のすすめ』（2020）／戸石四郎著『津波とたたかった人』（新日本出版社，2005）／杉村広太郎編『濵口梧陵伝』（広川町教育委員会刊，2016）

取材・執筆　山口 幸正（やまぐち ゆきまさ）

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後，産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し，改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立，『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動を取材。現在はフリーライター。

●創意社ホームページ http://www.souisha.com 「絵で見る創意くふう事典」をネット公開中